

## 第一章 淡窓・咸宜園の放学・遊山と寺社参詣

### はじめに

廣瀬淡窓が創設した私塾咸宜園は、全国各地から、実に五千人を超える門下生がその門をたたき、江戸時代最大の私塾となった。咸宜園がこれだけの発展を遂げた所以は、「三奪の法」や「月旦評」に象徴される平等主義と実力主義の教育など、斬新で特色ある教育が実践されたことにあったことは多くの研究者の指摘するところである。加えて私塾としての咸宜園が、地元の日田の町、とりわけ豆田の町と深い紐帯で結ばれ、結果咸宜園と豆田をつつむ空間は、「学園都市」とも呼べる状況にあったことも、この学園の発展に大きく寄与したのであった。その「共生」の実相については、本書本編『廣瀬淡窓と咸宜園―近世日本の学校遺産として―』（二〇一三）第二章で詳論したとおりである。

その上で、咸宜園の教育を考える上で、もうひとつの大きな特色をあげねばならない。咸宜園では、堀田村の咸宜園の構内での授業だけでなく、時に師弟同行して、時には塾生たちだけで、しばしば周辺の山野、河川、神社・仏閣などに向いたのである。

こうした特色ある学園生活の前提なり契機となったのは、咸宜園の特色のひとつである「放学」であった。ここで「放学」とは、塾生たちを毎日の勉強一筋の日課から解放し、よって日常の抑圧感を解消し、翌日からの学業に活力を与えようとするものである。そうした放学の日にあつては塾の清掃、井戸浚え、餅つきなど年中行事的なことも行われたが、中でも塾生が楽しみにしたのが「山に遊ぶ」、つまり「遊山」であつた。淡窓の「日記」に繰り返し現れる「諸生遊山」がそれである。こうした「遊山」は、今日の学校でいえば「学外活動」「学外学習」などにあたるといえる。ただ、これらの学校行事では「社会勉強」や「心身の鍛錬」

など、何らかの教育的目標なり目的が伴うのが常であるが、咸宜園の「遊山」はそういうものではなかった。師弟は、自由に日田の各地に向き、遊び、炊飯共食し、詩を読むなどしたのである。淡窓の自伝『懷旧樓筆記』や「日記」には、これらの放学・遊山、そして、これとかかわりの深い寺社等の参詣記事が数多く見えるが、これらに登場する寺社、名所・旧跡等は、今日、現地を確認できる所だけでも七十か所にのぼる。

咸宜園で、こうした活動が行われたことについては、淡窓自身の幼時から体験と資質がかかわっていたようである。淡窓はその幼時から、日田の自然をこよなく慈しみ、その中に点在する神社・仏閣等に遊ぶのを何よりの楽しみとしていた。『懷旧樓筆記』には、そのことを語る興味深い記事がある。

余、幼少ヨリ遊戯セシ地ヲ拳ケテ云ヘハ、先ツ大原山八幡宮ナリ。コレハ毎年放生会ノ祭りアリ。八月十三日ヨリ十五日マテナリ。其時ハ毎日晝一度、夜一度参詣シタリ。衆人ノ群集シタルト、売物ノ店ニ満チタルト、戯場ナトノ種々アルヲ以テ、娛樂トセリ。城内ノ觀音閣ニモ、数登リ、家人一同ニ、閣中ニ通夜セリコトアリ。又、羽野妙見ノ祠ニモ通夜セシコトアリ。羽野ノ金毘羅ニモ登リシコトアリ。東ハ会處宮八幡、本宮八幡ニ参レリ。隈川ヨリ南ハ越原觀音、鬼城觀音、普門寺、釜淵穴平、護願寺等ニ遊ヘリ。西北ハ吹上觀音、岳林寺ニ至レリ。

童幼ノ時ハ野外ノ遊、第一ノ樂ナリ。格別觀賞スルコト有ラサレトモ、秘力ニ門ヲ出ツレハ、志氣欣欣トシテ其樂盡シカタシ。是ハ余ニ限ラツ、世上ノ兒童モ皆シカリ。此ニ因テ見レハ、山水田野ノ樂ハ、人ノ天性ニ受ケタル処ニシテ、雅俗ノ分ナキコト、ナホ四端ノ人ニ於ケルカ如シ。然ルニ十四五歳ノ後ニ及ンテハ、情欲内ニ生シ、世事外ヨリ攻メテ天性ヲ失ヒ、山水ヲ見テモ、眉ヲノベス。風月ニ逢ヒテモ、心ヲ樂シマシメス。天受ノ樂ヲ失フコト、又ナホ人ノ利欲ニ纏ハレテ、四端ノ良心ヲ枯（カク）亡スルカ如シ、惜マサルヘケンヤ、悲マサルヘケンヤ。

淡窓幼時のこうした「野外ノ遊」に、多くは両親や親族が同行したのであるろうことを思えば、こうした自然への傾斜は、廣瀬家の家風の中で育まれ